



会員寄稿

## 大洲から「世界」をどう見るか

1 学年主任 土居 俊一

「遠くのもの小さく描き、近くのは大きく描く絵画技法」を遠近法といいます。哲学者ニーチェは、人間の対象認識のメカニズムにおいても絵画の遠近法と同様のことがあてはまると主張しました。つまり、人間は自分と近いもの（距離的なことだけでなく、心理的なことも含みます）に対しては大きく関心を持ち、逆に遠いものに対しては興味が薄らぐということです。このニーチェの考え方は、日本のことわざの「対岸の火事」「隣の火事に騒がぬ者なし」とも通じています。

たとえば、多くの人にとって遠い外国で紛争や飢餓に苦しむ人たちの痛みは「対岸の火事」になりやすく、かたや自分自身のことであれば比較的軽い怪我でも大きく「騒ぐ」といったことでしょうか。この論理によれば、私たちが見ている「世界」とは、遠近法によって各々が描いているものであり、人は「今の自分が知っている“近い”世界」だけを見てそれが世界のすべてであると勘違いしてしまいがちだということです。

さて、大洲城はなぜこの地に築城されたのでしょうか。それは、この地が地理的にはもちろん、長らく政治・経済・社会の要地であり、「広く見渡せる場所」であることが理由です。大洲高校はその城跡にたっています。だからこそ、本校は「世界を見る」のに最適な学校なのです。学術的な高みを極め世界中の人々の生活を一変させた中村修二氏（ノーベル物理学賞受賞）や、正義論と感情を見事に結びつけた芸術作品によってコロナ禍の社会に勇気と感動を与えた丑尾健太郎氏（テレビドラマ『半沢直樹』脚本家）など、本校の先輩方は数多の分野において、この大洲高校で「世界」を見る礎を築き、現在国内外多くの人々の心と生活を豊かにしています。

可能性に満ち溢れた本年度の1～3年生のみなさんにも、本校のこの大きな利を活かし、どんどん、「対岸」を「隣」に変えて行ってほしいと切に願います。大洲高校で学ぶ者にとって、「世界は遠いもの」ではありません。遠近法的作用によって昨日までの自分にはよく見えなかった世界にも、実は明日の自分を輝かせるチャンスとニーズが溢れているのです。大洲高校生には、感受性豊かな高校時代にどんどん視野を広げ、自分の世界観をより奥行きあるものへアップデートしていくことを求めます。そしてそれが、それぞれの長い人生をより善く生きるための価値観へとつながっていくと信じています。

最後になりましたが、保護者のみなさま、本年度どうぞよろしく願いいたします。